

無痛分娩 説明書

1 無痛分娩とは

硬膜外麻酔を使って陣痛の痛みを無くしたり、または少なくして出産する方法です。

2 当院の無痛分娩目標

陣痛の痛みをできるだけ取り除くこと。
可能な限り安全に麻酔を遂行し終えること。

3 無痛分娩可能な条件

麻酔部（腰椎L1～S5）に感染創がない。
極度の肥満でないこと（BMI28以下であること）。

4 硬膜外麻酔とは

硬膜外空に1mm位のチューブを留置し、硬膜外腔に麻酔薬を注入して陣痛、骨盤の痛み、外陰部の痛みを限りなく無くします。
麻酔薬はお母さん（妊婦）の下半身を麻酔（局所麻酔）するので、胎児に麻酔薬は入りません。

5 無痛分娩の麻酔（硬膜外麻酔）のタイミング

<初産婦>

陣痛が始まったらクリニックに連絡。

子宮口の開き、陣痛の間隔、痛みの強さ、妊婦の希望するタイミングを考慮して麻酔を行います。

前駆陣痛（本格的な陣痛の前に起こる不規則なお腹の張り痛み）が疑われる場合は、麻酔の時期を遅らせることがあります。

<経産婦>

基本的には計画無痛分娩を行います。

経産婦は個人差はありますが、破水したりすると急に陣痛が強くなって、お産が進むことがあり
自宅で動けなくなり、自宅分娩や移動中の車内で出産してしまう事があります。

そのため当院では安全のため計画分娩を推奨しております。

自然に陣痛が来たときは子宮口の開き、陣痛の間隔、痛みの強さを考慮して麻酔を行います。

6 麻酔中の注意事項

麻酔中は足がしびれて力が入りにくいので、歩くと転倒して怪我をする可能性があり、基本的には自力で歩くことはできません。よって自力で排泄することができないためチューブを使用し導尿して対応します。

7 無痛分娩のメリット

お腹から下半身の痛みが格段に軽く、または無くなる。痛みによる精神的なストレスからも解放される。痛みが無くなることで体に余計な力が入らないため、体力の消耗が格段に少なく、産後の回復が早い。

出産時に会陰や膣壁が大きく裂けることがあります。局所麻酔では広範囲を麻酔できないので縫合中にかなりの痛みを伴います。

無痛分娩は広範囲が麻酔されているので、縫合中の痛みはほとんどありません。(縫合中の痛みは0～10%程度)

緊急で帝王切開術が必要となった時も麻酔薬を増やすことで帝王切開も可能となります。手術を開始する時間を短縮することができ、お母さんや赤ちゃんの負担を軽減できます。手術後の痛みも麻酔薬を使用することで軽減することができます。(他院で帝王切開で一般的に行われる腰椎麻酔は約3時間で切れるため、術後はかなりの痛みを伴います)

8 無痛分娩のデメリット

血圧低下による吐き気、嘔吐

ほとんどの場合は血圧が安定すれば落ち着く、一時的な症状です。

分娩遷延(麻酔によって陣痛が弱くなって、分娩の進行が遅くなってしまうことです)

陣痛促進剤(子宮収縮剤)を使う頻度が上がります。

器械分娩(吸引分娩、鉗子分娩)の増加

麻酔薬の使用により自然分娩よりも力が入りにくいので、器械分娩の補助が必要になります。

麻酔開始直後の胎児心拍の低下

ほとんどの場合はすぐに正常な状態に回復しますが、胎児心拍の低下が続く場合は、まれに緊急帝王切開術が必要になることがあります。

排尿障害

麻酔後に自力で尿が出せない排尿障害が一時的に起こることがありますが、ほとんどが退院までに回復します。

頭痛

頻度は非常に稀ですが硬膜外腔の内側の膜に穴が空き、髄液が漏れ出して頭痛が起こることがあります。

神経障害

麻酔の針を刺した部分の一時的な痛み。

神経分布に沿った痛みの感覚の一時的な麻痺。

同じ体勢で長時間いると末梢神経が圧迫されて麻痺が起こることがあるため、出産時に時々寝返りをうつことで予防になります。

褥瘡(床ずれ)

同じ体勢で2時間以上いるとかかとやお尻が体重で圧迫され、皮膚細胞に酸素が供給されないことで起きる場合があるため、麻酔中も足をよく動かしたり、時々寝返りをうつことで予防になります。

その他

麻酔薬の副作用による発熱、皮膚のかゆみ
分娩後麻酔が切れてくると症状は落ち着きます。

9 極めて稀な重篤な合併症

局所麻酔中毒

麻酔薬の過剰投与、麻酔薬の血管内注入で起こることがあります。
初期症状は麻酔薬注入直後の口の痺れ、耳鳴り、視野の異常が出現します。ほとんどの場合30分程度で回復しますが、重篤な場合、痙攣、心肺停止を起こすこともあります。

高位・全脊髄くも膜下麻酔

硬膜外麻酔で使用するチューブ（カテーテル）がくも膜下腔に入って、麻酔薬注入後、呼吸困難や呼吸停止を起こすことがあります。万一そのような症状が出た場合は麻酔の効果が弱まるまで人工呼吸で対応します。

硬膜外血腫・膿瘍

硬膜外血腫は麻酔の針を刺す時や麻酔のチューブを抜く時に出血して起こり、下半身麻痺を起こすことがあります。
硬膜外膿瘍は麻酔のチューブを入れた所に膿瘍ができて、下半身麻痺を起こすことがあります。

アナフィラキシーショック

麻酔薬に対する強いアレルギー反応です。
血圧低下、蕁麻疹、気道のむくみ、呼吸困難、心肺停止等の症状が起こります。
アドレナリン（アナフィラキシーショック治療薬）を投与し対応します。

10 無痛分娩費用

無痛分娩処置費用（麻酔材料費、手技料） 10万円
麻酔薬費用別途